

3. キャンパスライフを支援する効果的なIT活用法

運営委員 海野 元伸（上智大学）
板倉 正義（獨協大学）
原 清（東洋大学）

1. 分科会のねらい

対話、規律、体験など、社会生活に欠かせない人間力の低下が見られる中で、学生の退学率が高まってきている。授業の履修、進路決定、就業、精神面での健康管理、課外活動、経済支援など、さまざまな不安を抱えている学生一人ひとりを確実に支援するための「キャンパスライフ支援」が必要である。本分科会は、キャンパスライフにおける学生の不安を取り除くためのITの活用について、先進的な事例を学ぶとともに、参加者相互の積極的な意見交流・討議を通じて、参加者一人ひとりの課題意識の高揚と資質の向上を目指すこととした。

2. 討議テーマ

グループ討議の全体的な方向性として、「何を実現していくためのツール」なのかという「目的」を意識し、目的を実現するためにITツールとしてどのような機能が必要であるかなどを考察し、ITによる実現性を確認することをねらいとして、以下の切り口からテーマ設定を行った。

- ・ 学生生活支援に役立つ学生ポータルサイトのあり方について
ポータルサイト導入済みの大学にあっては自大学のシステムの問題点を認識し改善に向け必要な要素を考察することを目的とする。未導入・導入検討中の大学にあっては、導入を進めるに当たり検討すべき事項を明確化することを目的とする。
- ・ 携帯電話・携帯端末等を用いた学生支援のIT活用モデル
ツールとして普及している携帯電話・携帯端末を利用する場合の効果、利点、問題点を認識することを目的とする。
- ・ 多様化する学生への個別指導・個別支援に有効なIT活用について
多様化する学生への対応の基本的な考え方、環境構築などを検討し、これらの基本的事項への理解を踏まえたうえでIT利用の可能性、手法を探ることを目的とする。
- ・ 多種多様なサービスの整理統合について
メール、授業支援、SNS等、様々なシステムを統合しようとする時に、学生生活支援により有効なものとしていくための基本的な考えを整理することを目的とする。

3. 討議の概要

(1) 事前レポートの活用

参加者には「事前レポート」として、各大学の「現状」「問題点」「今後」について提出してもらうことにより、自大学の状況・問題意識について整理をお願いした。この整理した結果を基に、事例発表やグループ討議を通じて他大学の状況を認識し、自大学の弱点や可能性に気付くきっかけを得ること、今後に向け改善を推進するための示唆を得ることを目的とするとともに、意見交換・情報交換を通じて、参加者個々人のモチベーション・関心を高め、得られた成果を大学に持ち帰り、各大学における実践へとつなげることを目的とした。

(2) 全体的な流れ

参加者は29人であった。所属部門別では、教務・学生関係が20人、情報関係が6人、総務・広報

関係が2人、賛助会員から1人であり、幅広い部門からの参加となった。

1日目の分科会は、始めに、分科会の目標・討議テーマのねらいについて説明を行いグループ討議の方向性を示した。次いで参加者の自己紹介の後、Aグループ（15人）、Bグループ（14人）に分かれ、グループ毎に「司会」「記録」「発表者」を置き、討議テーマの決定から議論を開始した。なお、前述のとおり、研修開始前に提出された事前レポートを集約した一覧表を配付し、討議の基礎資料とした。

2日目は事例発表の後グループ討議を継続し、3日目にグループ毎に討議成果を発表し、グループ間で質疑応答を行った。

（3）事例発表

事例発表は、2日目の冒頭に2大学から発表いただいた。大阪学院大学ITセンターの中嶋康二氏により、同大学で導入しているLMSに関連し、ID（インストラクショナルデザイン）への取り組み、情報リテラシー向上への取り組みについて発表された。引き続き、関東学院大学教務課の齋藤邦男氏により、推薦入学者等を対象とした入学前E-learningシステムとSNSを導入した結果、入学後の学習開始に向けた準備、入学に対する不安解消や友人作りに効果があったことが発表された。

（4）討議内容

各グループの討議経過は以下の通りであった。

< Aグループ >

初めに、各大学の現状と問題点を発表し意見交換を行なった。その結果、討議テーマを「学生生活支援に役立つポータルサイトの在り方について」とし、まず、ポータルサイトについてどのような運営を行なうべきか討議し、ポータルで運用する項目として、各種情報提供、各種書類の公開、利用者専用の画面表示、教室利用申請を取り上げた。各項目の検討を通じ、ポータルサイトとは「その学生が必要とする情報をひとまとめに得ることができるツール、言い換えると、不要な情報がなく、自分にとって有用な情報を学内外問わずに得ることができるツールであり、修学環境をサポートするもの」と定義した。次に、共通して抱えている問題点を洗い出し改善策について検討した。問題とされた事項は、利用率の低さ、提供情報を充実する必要性、運用ガイドライン設定の必要性、情報の見せ方の工夫などであった。

総括の段階で、IT化し利便性を高めることが学生にとって単純に良いことだろうかという疑問が提議された。対面してこそ得られる人間形成があるのではないかということから、IT化がもたらすメリット、デメリットを慎重に検討し、ポータルサイトを効果的に運用していくことが重要との結論に至った。

< Bグループ >

各大学のIT導入状況について確認するところから議論を始めた。その結果、各大学でポータルサイト導入、未導入の違いがあり、規模（予算）も異なってくるのが判明した。そこで、参加者全員が仮想大学の作業部会メンバーになった想定で、在学生を対象とした「低コストで高利用、満足度の高いポータルサイト構築」をテーマとすることとした。ポータルサイトの定義として「ログインした個人が必要な情報のみを入手できるツール」と置き、その上で学生に対してどのようなことを意識・期待してポータルサイトを構築するかに着目し、キーワードとして「自発的行動、学習習慣の構築、自立支援、利便性、学生と大学の触媒機能」を設定した。ポータルサイトの、①機能、②運用体制、③教職員へのアプローチ、④利用度向上のための工夫、⑤上記①～④を踏まえた上で

の『仕掛け』について、各大学の事例紹介を含めながら討議を進めた。

結論としては、理想的なポータルサイトを導入しても、最終的にはそれを運用する教職員の資質が問われることになり、学生にとって使いやすく分かりやすいシステム構築を目指し、それをサポートする教職員が情熱をもって親身に対応することが重要であるとまとめた。(グループ討議の討議内容及び発表内容の詳細は資料編を参照)

4. まとめ

(1) 分科会のねらいに対する結論

ほとんどの大学が何らかの形で学生生活支援のために IT を導入あるいは導入を検討していた。各大学の規模、IT 化推進の状況、IT に対する力点の置き方等の違いを踏まえ、参加者各人の考え方・立場から意見交換を行うプロセスを通じて、他大学の状況を推察・理解することにより、参加者は新たな視点の発見、視点の拡大を得られたと考える。特に、事例発表はいずれも先進的な事例であったため、参加者にとって、大いに参考となった。

終了後の自己評価に、「他大学の実践例を聞く事が出来、今後の取組みに活かせる」「他大学の先進性を知ることが出来、自大学の現状を認識できた」等の記述がみられ、また業務への姿勢についても「業務は担当者の資質に依存する部分が多い」「現場レベルの意見のみでなく高い観点から考えることの必要性を感じた」等の記載があり、新たな気づきがあったことが分かる。

また、「IT ツール利用により学生との対面コミュニケーションが減少することを危惧する」意見や「IT による『便利さ』の追求のみでなく、教育上の有効性、必要性を考えることも重要」とする意見があったことは、ツールを運用する側の能力や熱意の重要性、人材育成の必要性と組織体制の確立の必要性についての理解を示すものであることから、参加者のモチベーション・関心を高めるという分科会のねらいは概ね達成されたと評価できる。

(2) 討議テーマに対する結論

グループ討議開始前に討議の方向性とテーマについて説明を行い、討議成果の発表により総括は行いが、発表することのみを目的とせず討議の過程を重視し活発な意見交換をするようお願いしたが、このことを参加者が意識していたことにより、議論が有意義に進められたのではないかと考える。

両グループとも、学生ポータルサイトをメインテーマとし他のテーマと関連させながら討議を進めたが、同じような討議経過で進み、発表内容も似たものとなった。このことは、各大学がほぼ同様の問題に直面していることの表れと認識できる。学生ポータルサイトについて各大学で共通して問題、課題と認識していた事項は、利用率の低さ、運用体制の未整備（部署毎の対応の不統一、ルール未整備、他の掲示媒体との調整、基幹システムとの連携等）、個人情報保護の確立、携帯端末（携帯電話）の利用範囲等であり、この点に関して活発な意見交換が行われた。討議は、機能面、運用面を中心に進められ、機能面では、必要な機能を利用者（学生）側に立って分析し、今後の改善に向けた方向性を考察することができ、運用面の検討では、コミュニケーション・ツールとしての限界を認識するとともに、より有効な活用するためには教職員の意識改革が必要となることが確認できた。

グループ討議成果発表の内容自体は、時間的制約もあり、また各々のサブテーマ自体が多角的かつ奥行きが深かったため、表面的な内容に限られたものとなった印象があるが、討議の過程では様々な意見が出され、今後の展開に向けた萌芽が含まれた意見交換となった。

大学を取り巻く環境は厳しさを増している。志願者数の減少による入学生の多様化傾向、学生の志

向の変化、社会からの要請の変化等、大学が対応しなければならない課題が山積している。こうした問題を解決するためには、個々の学生への肌理細やかな対応が必要となり、IT利用を前提にしなければ有効性を期待できない。ITをどのように活用していくべきか、有効な利用方法について常に検討・検証すべき問題である。また、経営的視点、すなわちコストパフォーマンスの評価も今後検証テーマとなり続けるであろう。キャンパスライフを支援するためのIT利用については、様々な観点からの検討が求められている。今回のグループ討議は参加者各人にこのことを改めて意識させることとなり、次の展開に向けた示唆となったと考える。